

# 300避難所に医師派遣



石巻赤十字病院と石井正医師の歩み  
〔石巻赤十字病院の100日間、などより〕

- 2006年5月 津波の来ない内陸部に病院を移転
- 2007年4月 医療社会事業部長に任命。1年かけて災害マニュアルを作り直す
- 2010年1月 実務担当者ネットワーク協議会結成
- 2010年9月 民間企業と災害時応援協定
- 2011年2月 県災害医療コーディネーターに委嘱
- 3月11日 東日本大震災発生
- 14:46 災害対策本部設置
- 15:43 トリアージエリア設置完了
- 12日 最初の応援救護チーム到着
- 2:26 自衛隊へ到着
- 5:47 院内に人があふれはじめる
- 11:00 給水車到着
- 11:27 仮設診療所立ち上げ。次々と患者搬送、野戦病院の様に
- 14:42 商売再開
- 13日 商売再開
- 14日 薬を求めた人が殺到
- 16日 水道復旧
- 17日 市内全300避難所のローラー作戦開始
- 20日 合同救護チーム立ち上げ
- 21日 インターネット復旧
- 24日 ガス復旧
- 26日 応援が1日最大90チーム、医師100人に
- 28日 エリア・ライン制の導入
- 4月7日 復興6強の地震発生
- 10日 都市ガス復旧
- 11日 一般外来再開
- 5月9日 トリアージ黒エリアが0人に
- 9月30日 合同救護チーム活動終了

宮城県石巻市の石巻赤十字病院は、東日本大震災で地域の医療機関が機能不全に陥る中、地で唯一の災害拠点病院として市民の生命を一手に背負った。石井正医師は震災後、被災地医療コーディネーターとして全国から駆けつけた計一万五千人の医療者を指揮し、市内全三百カ所の避難所へ医師の派遣を実現。日本の災害医療史上、空前の決断とたええられた。未曾有の災害に司令塔はどう対応したのかを、一同にわたる（加藤喜）

「災害医療コーディネーター」に選ばれた石井正医師。震災前、東北の災害医療コーディネーターとして、東北各地の災害医療コーディネーターを務めていた。震災後は、被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。震災後は、被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。

## マニユアル現実的に

石巻赤十字病院の医師 石井 正さんに聞く

「被災地医療コーディネーター」として、被災地医療コーディネーターを務めていた。震災後は、被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。



石巻市に避難した約10万人、被災者約20万人。被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。震災後は、被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。

「被災地医療コーディネーター」として、被災地医療コーディネーターを務めていた。震災後は、被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。

## 患者に順位心苦しい

「被災地医療コーディネーター」として、被災地医療コーディネーターを務めていた。震災後は、被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。

「被災地医療コーディネーター」として、被災地医療コーディネーターを務めていた。震災後は、被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。

「被災地医療コーディネーター」として、被災地医療コーディネーターを務めていた。震災後は、被災地医療コーディネーターとして、被災地医療コーディネーターを務めていた。

次回3月5日掲載。引き続き石井正さんのインタビューをお伝えします。

## つらさ 夢の広がり

東京の大学での1年を終え、梨奈さんが会津若松の仮設住宅に帰省してきた。

「離れている時は電話で仲良く話せるのに、久しぶりに顔を合わせると、沙也加とはつまらないことだけかになっちゃう」そう話す梨奈さんの声は、それでも弾んでいる。

「やっぱり家族といると安心」

東京生活は、新しい出会いや刺激に満ちていたが、家族と故郷を苦しめる震災への関心が少しずつ薄れていくのを実感してきた。

福島や東北の話をする、場が暗くなってしまう。友人に「前を向いて行こうよ」と言われても、素直にうなずけない時もあった。

この1年、自身でいちばん変わったの

いつの日か  
原発1キロからの避難

は、目指す職業に選択肢が増えたことだ。高校時代から、持ち前の運動神経を生かして体育教師を一筋に志望していたが、「被災をきっかけに、警察官になりたいとも思った」。

避難した先々や震災を伝える報道で、住民を誘導し、懸命に不明者を探す姿に心を打たれたからだ。1年生ながら、大学の就職説明会に顔を出し、現職警察官の体験談を聞いたりもした。

「まだ19歳だし、焦って決めるつもりもないけど」。被災のつらさを、夢の広がりに変える力を、梨奈さんは持っている。

**福(はなわ)さん一家** 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(44)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生生活。